

第2 問題作成部会の見解

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 英語以外の外国語については、大学入試センター試験の枠組みを受け継いだ『筆記』テストを課し、「リスニング」テストは実施しない。
- 教科としての外国語科の目標である「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う」に基づき問題作成を行う。
また、実際のコミュニケーションを想定した明確な目的や場面、状況の設定を重視する。
- 問題作成に当たっては、CEFR等を踏まえた力を問うことをねらいとして作成する。
その際、大学教育の基礎力を踏まえ、また、高等学校において英語以外の外国語を初めて履修する者もいることを考慮し、問題作成を行う。

2 各問題の出題意図と解答結果

大学入試センター試験から共通テストへの移行にともない、大問ごとに問うポイント（文法・語彙など）を明確にするとともに、資料の読み取りや長文の読解に重点を置いた問題構成に変更を行った。

これまでのセンター試験における問題作成の大枠と良問の蓄積を受け継いだうえで、基本的知識を問う問題と、思考力・判断力・表現力等を問う問題のバランスを配慮し、問題の数、配列、配点を見直した。具体的には、語彙問題の数を減らし、設問形式も語彙知識を直接問うものから、語句の用法に基づいて正解を導くものに変更し、語彙問題減少分を読解問題に重点化して配分した。また、大問の配列を、発音、文法、語彙・表現、整序作文から意味内容、読解へと問題の漸進性に配慮して変更した。今年度もこの形式を踏襲して問題作成を行った。

なお、フランス語の表記は従来の正書法に従っているが、近年フランスの学校教育に導入された新たな正書法と齟齬が生じないように配慮した。最近の傾向を踏まえ、また受験者に分かりやすくととの配慮から、大文字にもアクサン記号を付けている。

第1問 発音問題

つづり字の読みを通して、「聞く、話す」能力の基礎となるフランス語の発音に関する基本的知識を問う問題である。つづり字と発音の関係の理解度を試すために、できるかぎり多様な出題を心がけた。語の選択に当たってもなるべく多様なものとなるよう注意した。リエゾンについての知識を問う問題では、語句レベルのみならず、文中でのリエゾンも積極的に扱うこととした。基本的な発音の規則を正確に把握していれば容易に正解に到達できるよう配慮している。

問1は語末の子音sの発音を問うもので、正答率が高く、識別力も十分なものであった。問2はim, ymの発音を問うもので、正答率が高く、識別力にも問題はなかった。問3は語中のbの発音を問うもので、正答率が高く、識別力がよく出ていた。問4はaiの発音を問うもので、正答率が高く、識別力も十分であった。問5は例年どおりリエゾンの規則を問うものであった。今回は「単数名詞と後続する付加形容詞間ではリエゾンしない」ことを問うもので、正答率は高く、識別力にも問題はなかった。

第2問 語形変化の問題

語形変化を文法・語彙・発音の知識と関連づけて問う複合的問題である。できるだけ多様な

品詞・発音にわたって出題するよう配慮した。高校側の意見を尊重しつつ、文法、発音、つづり字に関する基礎的な知識を広く試すよう努めた。

問1は名詞crimeから形容詞criminelを問う問題であり、やや解きにくい問題であったのか、正答率は約3割と低かった。なお、選択肢においてつづり字と発音の関係が必ずしも明確でないという高等学校教科担当教員の意見にも鑑み、今後の提示の仕方について検討することとした。問2は動詞promettreから名詞promesseを問う問題であり、正答率がやや低かったが、識別力は十分だった。問3は形容詞égalを単数から複数にする問題で、正答率は十分に高く、識別力も高い問題であった。問4は動詞s'asseoirの現在形から複合過去形にする問題であり、正答率はやや低かったが、識別力は十分だった。問5は形容詞vifから副詞vivementを問う問題であり、正答率も高く、識別力もある問題だった。

第3問 文法の問題

文法に関する基本的知識を問う問題である。基本的な文法事項を、偏ることなく、広く問う多様な問題の作成を心がけた。また他の問題と同様、実際に使われる自然なフランス語になるように配慮した。

問1はce n'est pasの後の名詞に付く不定冠詞は否定文でも変わらないことを問う問題。基本的な文法事項を問うものだが、正答率が大問の中で最も低かった。ただし識別力は低くはなかった。問6は否定に対する肯定siを問う問題であり、やや正答率が低かった。問2ではde plusという熟語表現を問うており、高等学校教科担当教員より難易度が高いという指摘を受けたが、実際の正答率は低くはなかった。接続法を問う問4、目的語人称代名詞を問う問5は正答率が高く、識別力もある問題だった。過去分詞を問う問3はやや正答率が低かったが、識別力は認められた。

第4問 語彙・表現の問題

語彙・表現に関する基本的知識を問う問題である。与えられた文脈の中で、基本的な言い回しや慣用表現・熟語に関する知識を問うように心がけた。また、他の問題と同様、実際に使われる自然なフランス語になるように配慮した。

問1は動詞céderの基本的語義を問うもので、正答率がやや低かったものの、識別力には問題がなかった。問3はun morceau deという慣用表現を問うもので、正答率が高く、識別力も十分であった。問4はespècesの語義を問うもので、正答率と識別力がともに適切であった。なおこの問題に関し、フランス語圏滞在経験の有無が解答に関わるのではないかという指摘を受けた。この点に関しては今後の問題作成にあたってより一層留意したい。動詞comprendreの第二義以下の語義を問う問2、défendreの第二義以下の語義を問う問5、platの第二義以下の語義を問う問6は、それぞれ正答率がやや低かったものの、識別力は認められた。

第5問 対話完成問題

与えられた会話の一部から、日常生活における自然な状況を判断し、対話を完成させる問題である。具体的で想像しやすい場面や状況を設定しつつ、内容が多様なものになるよう心がけた。また、できる限り明解なフランス語による表現を採用した。さらに、会話の一部だけを読んで正答を導くことはできず、全体を読まなければ正解に至ることができない問題を心がけた。

問1および問2は正答率が高く、容易に正答に到達できる問題であった。問3は、識別力は高いものの、正答率は5割強に留まった。誤答選択肢のすべてが選ばれていることから、会話状況が理解しにくかった可能性がある。問4も高い識別力と5割台の正答率である点で問3に似ているが、要因としては、「Tu exagères!」という応答を理解することが難しく、「スポーツに興味がない」と「サッカーをしたことがない」ことを結び付けた可能性が考えられる。

問5は、問1、問2よりは難易度がやや高いものの、十分な識別力を備えており、文脈の理解を適切に測ることができた。

第6問 整序作文問題

例年の出題形式・傾向どおり、与えられた日本語を手掛かりに、平易な語彙・表現を用いてフランス語で作文する能力を問うことを目的としている。日本語文は、自然でありながらも正答を導きやすいものとなるよう配慮した。正しい語順を理解していなければ正答とならないよう工夫するとともに、空欄の位置によって難易度を調整している。

se douter queを問う問2、Ça vaut la peine deを扱う問3、指示代名詞ceuxの用法を問う問4はいずれも基本的な内容を扱っており、正答率は十分に高く、識別力も高い問題であった。問1はne... queの否定と関係代名詞を含む文章ながら、主語と動詞が示されていることで容易な問題となった。問5はavoir beau + 不定詞の完了形を問う問題であった。丁寧に扱えば正答に至る問題であり、正答率は低かったものの高い識別力を備えていた。しかし、不定詞の完了形を問うのは難易度が高いのではないかという、高等学校教科担当教員の指摘を受けた。この点を踏まえ、難易度に関しては今後の問題作成においても十分に注意を心がけたい。

第7問 資料・会話読解問題

図表等を用い、日常生活や身近な問題に関連したフランス語の知識・能力を問うとともに、それに基づいた思考力・判断力・表現力等を試す問題である。高校生にとってより自然でなじみやすい内容となるよう心がけるとともに、図表等の資料に基づく適当な分量の文章または会話を取り上げた。AとBの中間に分かれ、別々に示された図表と会話を関連付けながらフランス語の資料を読み解く能力を求めている。Aは「星占い」、Bは「量り売り専門店の案内文」を読み取る問題で、バラエティのある出題となるよう工夫をこらした。

Aについては、受験者が親しみやすい題材であり、3問すべてにおいて十分な識別力があつた。Bについても、おしなべて正答率は高く、3問すべてにおいて識別力が保たれていた。その一方で、Aの問2と問3、Bの問3については正答率がやや低めであった。とくにAの問3においては生活に即した語彙が現れ、フランス語圏での生活の有無によって解答が影響を受けた可能性があるとの高等学校教科担当教員からの指摘があつた。同じような指摘はBの問2にもなされており、今後の問題作成において考慮していくべきことと考える（とはいえ、Bの問2の正答率そのものはかなり高く、識別力も十分に保たれていた）。

総じて第7問については、解答にいたるまでに様々な要素を考慮しなければならず、そのことが設問の難易度を上げることにつながっていると高等学校教科担当教員からの指摘があつた。受験者にフランス語読解にもとづく思考力・判断力・表現力等を求めつつも、難易度の適度なバランスを保つことができるように、今後の問題作成において十分に検討をしていきたい。

第8問 長文読解問題

論旨が明快で論理に一貫性のある文章を素材として選び、事柄の因果関係や対立などを正確に読みとる力や、文章の流れを論理的にたどる力を問う問題である。近年の出題を踏襲し、なるべく平易な表現、馴染みやすい題材を選択するようにした。ただし共通テストへの移行に伴い、配点を変更し本文の文字数も増やした。その結果、やや難易度が上がる傾向にあるが、論旨が取りにくくなることのないよう十分に吟味した。常識だけで正答にたどり着けるような問題や、単語や成句の知識を問うだけの問題は排除するよう心がけた。また、文章の流れにそって内容全体の把握ができているかを試す問題を取り入れた。そのために、文章は語彙・文法的に難度の高いものを避けて、より明確に思考力・判断力・表現力等を問うことができる問題と

なるようにした。

第8問は全体的に見て、昨年に比べて難易度が上がった。問1は文脈を正しく理解したうえで語彙を選択する問題であり、正答率はやや低かった。問2は接続語を選択する問題であり、識別力が高かった。問3は本文と一致しないものを選ぶという問題形式であったため、難易度は上がったが識別力は高かった。問4の正答率は高かった。問5は比較的平易で正答率も高かった。問6は正答率がやや低かったが識別力は高かった。やや想定外の状況を問う問題であったため難易度が上がったものと考えられる。問7は本文の内容と一致する文を6つの選択肢から2つ選択する問題である。正答率は約6割程度で昨年と比較しやや平易な問題となった。問8は本文のタイトルを考えるタイプの問題形式であり、昨年同様正答率は約5割に留まった。今年度第8問は文章の難易度が上がったため、全体の正答率は下がったが、おしなべて識別力は高かった。文章の難易度や分かりにくいフランス語の表現については、今後もよく検討するようになりたい。

3 ま と め

以上、問題作成方針、問題形式と内容、高等学校教科担当教員から寄せられた意見に触れながら、解答結果を分析・検討し、問題作成分科会としての見解を述べた。

今回は共通テストにかわって二度目の試験であったが、識別力の高い問題が多く、全体として幅広い受験者層に的確に対応できていたと考える。ただし平均点がやや低い結果となったことには十分に注意したい。今後も試験の目的を考慮しつつ、高等学校における学習範囲を逸脱しない適切な出題内容を心がけ、極度に難易度の高い問題や出題傾向の偏りを避ける配慮を継続していきたい。

試験問題に対しては、高等学校教科担当教員の方々をはじめ、各方面から有益な意見を頂いた。あらためて感謝を申し上げます。